学習成立の技法④　学習形態に多様化

従来の一斉画一授業では、学習形態がワンパターンになりがちでした。

つまり、教師による発問→子どもの返答→教師による評価という形態です。

これを、ツーウエイ型学習ということにしましょう。

私は、このツーウエイ型学習を否定しません。

その理由は次のようなものです。

多くの授業は、やはりツーウエイ型で行われているし、一斉にある事項を教え、ある程度以上の成果を上げるにはこの形態がやはり優れていると思うからです。

しかし、この形態の学習はどうしても単調になりがちです。

そこに、子どもたちは飽きてしまいます。

その飽きに具体的に対応しようとするのが、この学習形態の多様化です。

例えば、音読の場面でも、今までは教師が判読し、子どもが個々に練習し、それにどれだけ近づいたかを評価されていました。

そうした形態も、必要ではありますが、時にはペア評価で「一文交代読み」をするや、グループでのそれに取り組んでみると言うことが必要です。

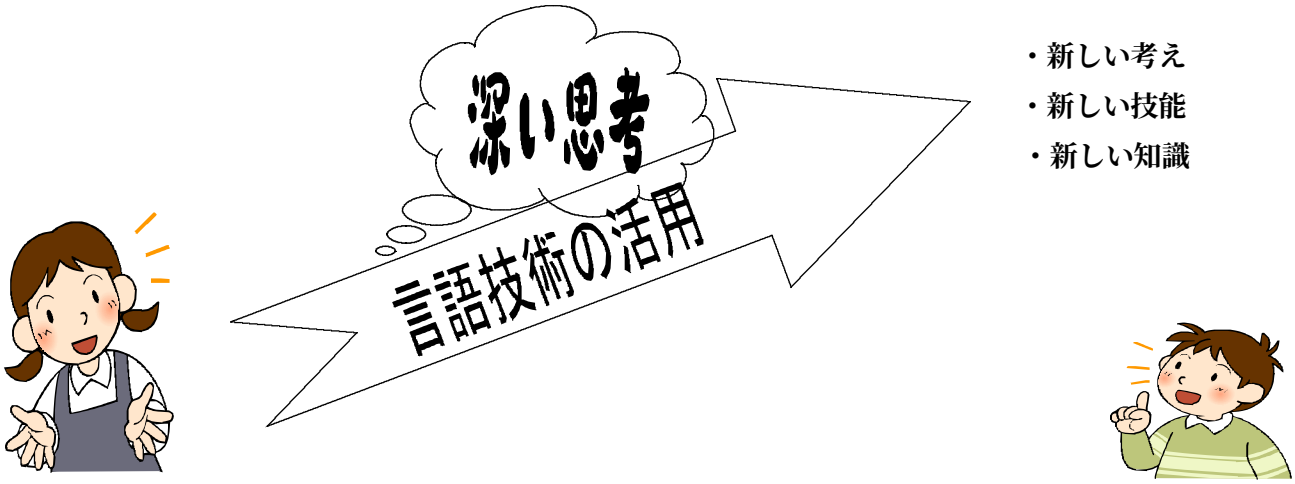
こうした学習形態の多様化は、本校で行われているワークショップ型の授業でもすでに取り入れられていることです。

村井先生の授業から見えてきた国語外授業のポイント

先ず第一に、「国語外」でのねらいは、「深い思考」です。

国語科やその他の教科・領域で身につけた「言語スキル」を駆使して思考することによって、子どもたちの成長を望むということです。

この点十分に村井先生の授業では、その意図が見えていたと思います。



研究の方向をもう一度確認しておきましょう

本校の研究の目指すところは、何だったでしょう。
「言語技術の定着」でしょうか。
実は違います。
「言語技術の定着」はあくまで手段です。
その手段を通して、子どもたちを「胸を張り、堂々と生きられる」ようにすることがめざすところです。
教育のすべての営為は、実は「技術の定着」を目指しているようであって、そうではないのです。
例えば、算数の計算がたいへん得意な子がいるとします。その子が、計算は速いが、算数が嫌いであったり、学習への意欲が低くては意味がないのです。
そうした状態を避けるためには次のような方策が考えられます。

学習そのものがおもしろい

言語技術を身につける際に、その学習自体が楽しくなるような仕組みや仕掛けが必要になるわけです。

適切に評価されている

その子が身につけた言語技術が、単に技術としてとどまるのか、それとも生きる糧として働くかは、教師や他者からの評価次第ではないでしょうか。

技術が生きて働く場が保障されている

国語科でつけた力が、単にその単元だけでしか扱われないとしたら、身につけた技術は何のためだったのでしょうか。
小学校の算数が、高校の微分や積分と比べ一般にその重要性が認められるのは、まさに生きて日常の場で使われるからでしょう。
国語科で身につけた言語技術に対する有用感を高めるには、一つは実際に使わせること、今ひとつはその技術によって本当に他人とのコミュニケーションが変容すると言うことです。
例えばこんなことが言われます。
「道徳の時間にどんなにいいことを発言していても、普段の生活まで変わらないよね」
こうした発言は、道徳に限ってよく使われるようですが、本校の研究の言語技術にも残念ですがいえる場合がありそうです。
私は、この「言語技術の定着」を通して、子どもたちが生き生きと多謝とコミュニケートし、子ども同士の関係が変わり、学級が作られていくような単元構成を作りたいと思っています。